

翌日昼前、マキを乗せた早馬口は宅急便白金センターに滑り込んだ。ホームで作業中の人達は往年のサイドカーに眼が集まった、Gジャン着込んだ一平が大股開きで降りる、続いてマキが、同じくGジャン着込んでいるが尻がはみ出している短パンでスーッと降りフルフェイスをとった、メットのの中に束ね程よく色付いたロングヘアーが垂れ下がる、作業人の眼が集中するは仕方ない。

マキちゃんじゃないの、いらつしゃいと作業着姿の女性が奥から声を掛けて来た、なっちゃんだ。

「一平さん、マキちゃんと一緒にコーヒー飲みに来てくれたの嬉しい、あと少しで作業が切りつくから休憩室に先に行つて」

宮城奈々子は事務所の窓際で作業している人に両腕で○サインを送った。二人は会釈しながら休憩室に入った、窓に近い席に座る、宮城奈々子が咳き込んで入って来る。

「コーヒーの腕大分上がったよ今作るからね、ちよつと待ってて」

「業務中申し訳ない、お忙しいよーでしたら出直します」

「大丈夫、忙しいってほんの一時よお昼過ぎまでは大丈夫」

一平はマキを見ながらよわった表情を浮かべた、マキはドンマイドンマイと言った表情。程なくしてコーヒーカップと水をお盆に載せてなっちゃんが休憩室に、香りが漂う。

「どう、私が入れたコーヒー、香り良いでしょう先月仕入れたばかりなキリマンジャロです」

いっぷくにはない味ですとマキが言う、一平もあいずち打つかのように肯く。

「ところで一平さん、今日はコーヒー飲みに来ただけではないでしょう、顔に描いてある」

「なっちゃんに合っちゃー敵わん、聞きたいと言うか確認事で来ました」

「連休なので皆交代で休みをとっています、今日はセンター長が休みです、私で分かれば何なりと答えします。コーヒーのお代わりもどうぞ」

「早速で申し訳ない、少し前だが二十六年十二月と二十七年二月に夏目浩二名で三鷹の荒木田輝夫に小荷物が送付されている。その時どのような人物が出しに來たかが知りたい」

ちよつと待つてねとなつちゃんは難しい顔しながら事務室に消えた、キリマンジャロとやらのコーヒーいけるなとマキが言う。

「おいおいマキ、アルコールは兎も角コーヒーの味分かんのか」

「まりさんに鍛えられたよ多少はね」

なつちゃんが五十絡みな女性を連れ戻つて來た。

「確かに二件とも内から出されています、二十六年十二月と十二月五日にこちらの三坂千賀子さんが受付しています、二十七年二月にも受付していますがその日の担当は今日は休みです、三鷹営業所と同様配送向上の為気付き事はメモっています、その日出しに來た送り人は女性と記されている」

「それ以外何かメモ書きはないですか」

と一平は三坂さんとなつちゃんを見た。

「三坂さん、他に何か気付いた事ない」

「なんせ記憶が薄れている、ここには落ち着いた女性とも書いてある、想い出せるような出せないような、ちよつと待つて下さい」

「どんな事でもいいんだ」

プレッシャーを掛けないように一平はマキを促し窓越しの往來を見始めた。

「つあつ刑事さん、事務員でもあるようだったがダークスーツを着込み落ち着いていた、応対は会社役員の様な話方、この界限には大使館も多い、館員でもあるような、がこれ等は私の私観ですが」

「ありがとう、三坂さんどんな事でも良いの身体とか顔に何か特徴の様なものは、例えば黒子とか」

「特徴ねー、私の身長が百五十五センチだから私よりも少し背は高く百六十センチ位、コート姿ゆえですが細身の様だったと思う」

「背格好は分かった、が一年半前の事です小生も思い出せと言われても無理、ですが決め手となる顔に特徴は化粧が濃かったとか髪が長いとか」

「年のころは三十代後半いや四十代かな、黒縁のメガネをかけ品のある顔だだったような」

「それだけでも思い出してくれて有難うございます、三坂さん手間取らせませんモニタージュ作成に協力はして頂けませんか」

一平さん、となっちゃんが割って入って来た、

「似顔絵ならセンターのアルバイトに上手な人がいます、現役の美大生で私を始めセンター長、何人かの配送員も描いて頂きました」

「その美大生さん、今日は出勤している」

「はい、出ています呼んで来ましょう」

なっちゃんは慌ただしく出て行く、程なくして今風な髪型した若者を連れ戻って来た。さっき言った美大生の青戸康ですと一平に紹介する。

「こちらが記憶を頼りにモニタージュ作成して下さいと言っています、協力してくれない」

一平は美大生が戸惑いを見せるかと想ったら三坂さんが困惑した表情を浮かべた。

「無理もない薄れている記憶です、だが小生等はコンマ以下の手掛かりでも無視はしない。覚えている範囲で構わない、例え容姿だけでも顔の輪郭だけでもお願いできないでしょうか」

「私からもお願いします、センター長が居たってお願いすると想います」

三坂さんは美大生を誘うか休憩室を出て行った、なっちゃんは安堵の表情を浮かべ話し始める。

「きつと手掛かりになるようなモンタージュ出来るよ、三十分位かな」

あらもうこんな時間、お昼だねーどうしようかと二人を見た。

「小生も腹減ってきました、なつちゃんとあのお二人方も一緒に、よろしかったら小生がお昼代だそう、近くに食事処は」

「有難うございます、でもお客様はいつ見えるかもしれませんが昼休みはありません、三人いっぺんにセンターを空ける訳にはいきません」

じゃー一平、何かとろうよとマキが。

「はい、それなら喜んで頂きます、この先の角を曲がった所に日本ソバ屋があります。ソバ屋と言ってもこの丼物はいけます、はいメニュー」

そう言えばソバ屋の丼物は美味いとの評判しきりだなと言いながら一平はメニューに眼を通した。

「おおーこれでいくかなカツ丼のミニざる付きで、いかがかな」

私はカツ丼だけでいいとなつちゃん、マキも続いた。

「あの二人はどうだろうか」

「三坂さんは私達と同じでいいが青戸さんはミニざる付きでお願いします、ところで一平さん取り調べ中にカツ丼が出されると、あれは真実ですか」

「テレビドラマでカツ丼を出し自白に追い込んだようなシーンがあったがドラマでの事、だいぶ前の事だがカツ丼食わしてくれれば喋るよと言った事もあったが警察官が食事を御馳走する事態、違法行為に当たる、その様な風習は今はない」

従業員達が食事しに休憩室に入ってきた、一平にマキに会釈する。アルバイトの大学生等がマキを見、一緒に写真撮って下さいと近づいた、そう言われては満更でないマキ、はーいと返事し表へ、早馬口に跨ったり腕組んだり、モデル気

取りだ。

「あの青戸康さん、食べる時間なくなっちゃうんじゃないか」

「多少の時間のづれは大目にみるの、がここのセンターの良さです」

「大堀センター長もなかなかやるじゃない」

「だからこそ士気も上がります、実際大堀さんが来てから、扱ひ量は毎年上がっています」
そうこうしてら出来ました、と三坂さんと青戸さんが入って来た。

「細部までとはいかないが想いの外よくできました見て下さい」

二枚のA4紙がなつちゃんから一平に手渡された。

一枚目は全体の容姿、七三に分けた長めの髪は左右に分れ胸元に、スーツの上にコートを羽織った全体像、二枚目を見た一平はツアツと小声を発した。

「その画像がどうかしたの、細部は別にしても顔だちも整い気品ある表情に描けていますが」

「似てる、似てるんだ小生の知り合いの知り合いに、全体像はどこでも見かけると思うがこの顔画像、一度しか会っていないが細部はともかく髪型と言ひ、黒縁メガネをかけた顔の輪郭、キャリアウーマンと言ひか気品さもあるこの表情、似てる」

黒目が異様に大きくなった。

「マキも会っているマキに聞いてみよう、あいつまだモデル気分にいるのか早く入ってこねーかな」

なつちゃんが事務室に行き窓から大声を張りあげた。

「マキちゃん一平さんが見てもらいたい画像があるって入って来て、アルバイトさん十分撮ったでしょうもういいでしょう」

「見せたい画像ってどれ」

これだと言って二枚の画像をマキの前に出した。

「これって大使館の海老原幸子さんじゃーないの、このコート姿も似通っている」

「マキもそー想うか、さっちゃんに会って聞いてみる必要があるな」

「そのさっちゃんて誰」

「ピース王国大使館員であり翔平さんと机を並べていた女性です、そのキャリアウーマン風に描かれた画像は彼女を知る人ならすぐわかる」

おまचीーの声、カツ丼が届いた。

「三坂さんと画家大学生さんの分もあるよ、一平さんのおごりよ御馳走様と言つといて」

「コース料理ではなくカツ丼です、お二方とも礼には及びません、それよりこの画像これからの捜査に役立つこと請け合い、大きな進展です有難うございます」

五人は長テーブルを挟んで食べ始めた。さすが大学生だ食べるのが早い五分少々でござんと言いい残し出て行く。一平は食べながらマキに言った。

「幸子さんにコンタクトとりたいんだがどーしたらいいだろう、まさか大使館にもしもしはないよな」

「のりにとつてもらうのがベター、今日の沖縄発最終便でオフに入る、今夜遅くか明日には連絡着く、それからでも遅くないと想うが」

「でも一平、ひよつとしたら幸子さんが二千万円と想われるお金の授受に関与したら」

「そのひよつとしたらはない、小生は大学を辛うじて卒業し刑事畑に入った、語学じゃー皆に負けてしまう、が人を見極める力を同僚等に悟られんよー小生流に学び人を見つけて来た、自慢話は小生の柄ではないがその甲斐あつてか確率百パーセントで事件解決、しかしその都度、上司との対立もあった、それ故昇給も所轄の刑事課長どまり。等々しゃべったところで、小生は人の善悪の見分けは付く、改めてそのひよつとしたらはない」

フーンとマキが返事らしきを。

刑事になりたての頃、小学校時代に親父が面白いマンガが見つかったと小生に見せた、そんな事を想い出した。折つてあるところを読んでみる、鉄庵アトムや鉄人28号、赤胴鈴之助とはちーと違う、一冊のマンガ本を親父がちゃぶ台に載せた。

「小学生高学年と想われる男の子と妹と想われる女の子、暮れの慌ただしさ溢れる道端でゴザに畏まり前に空き缶を置き道行く人に頭を下けている、通りすがりの人々は見向きせずが多い、時折チリーンと音がする程度。着飾った女性が前に、財布の中の小銭をそっくり缶の中に入れてくれた、兄妹はひととき深く礼をした、その後もチリーンと音が時たま、妹が寒さに堪えられなくなったか兄ちゃん帰ろうよ、うん兄ちゃんも寒くなった帰ろう、そんな時一人の酔っぱらいが立ち止まった、乞食の兄妹が恵んでやろう待ってな、財布の中に硬貨は十円玉しかなかった、男は酔っぱらった勢いでとつとけとばかりに缶に投げつけた、兄妹は深々と頭を下げる、ゴザを畳み家路に。病にふせる母親が起き加減でおかえり、母ちゃん葉代出来たよ、お金持ちのおばちゃんがいっぱい出してくれたよ、それにひきかえ最後に来たあの酔っぱらい十円玉投げつけやがんの。そうかいご苦労さんだったね母ちゃんも助かるよ、だけど兄ちゃん人は見なりや言動だけでは分らんものよ、北風寒いがその二人の家庭を見て来たら。

母ちゃん行つて来るよと帳も降り暗くなった夜道に出て行つた、二人の家庭はすぐ見つかった、酔っぱらった家庭から夫婦の会話が聞こえて来た。忘年会はすき焼きだった、ビールも美味しい最高よ、だけどタプーが例の如く、上司がグチャングチャンになっちゃって白けムード、仲間が何とかまとめてお開きとなった、駅を降りた。道端で衣服は継ぎ接ぎだらけの小学生の兄妹が空き缶を置き頭を下げていた。手は皸だらけ、財布見たら小銭は明日のタバコ代しかない、酔いも手伝って明日はタバコ抜きだと小銭を投げつけてしまった、投げつけたのは良くないがよいことしたじゃないのと奥方が、その兄妹もきつと喜んでいると想います。明日のタバコ代は何とかしましょう、でも又見かけたら自分の出来る範囲以内でね。

着飾った女性の家庭では。駅をでた道端で乞食の兄妹が居たの、買い物で札ばっかし出してたらじゃり銭が貯まって

重くてしょうがなかったから前の空き缶に放り込んであげたの、助かったこれで軽くなった。いくら重いかつて乞食に恵むなんてどうしようもないな、何の恩恵もない、もう乞食になんか相手にするんじゃないぞ。

ただいまと兄ちゃんは帰って来た、床で母ちゃんがどうだったと聞いた

「何だか酔っぱらって十円玉投げつけた人の方が良い人に想える」

「そうかいそれが分れば充分や、おじやがそこに出来ているからお食べ」

見終わったと言うか読み終わった。親父がどうだったと聞いて来た。

「幼心だが人は見かけでは分からない」

と答えた。マンガとは言え良いこと書いてあるだろうと笑った」

「小生の刑事魂ルーツはその辺から始まったかな、と言ったところで連絡は早いにこした事はない、皆に余計な心配かけてもな、よし決めたマキ、のり經由で連絡は頼むぞ」

マキは箸を置きVサイン。

「二十七年二月の件は明日応対した者が出勤します、モニタージュ作成しておきます、先に言ったかも知れませんが長身ですらつとし一見モデル風、浅黒い女性と記されている」

となつちゃんはモグモグしながら言う。

壁と天井の境を見ながら一平はお茶をすすり、大分登ったな富士山の六合目から七合目だとブツブツ独り言。

あー美味しかったーごちそうさん、お茶もだけどコーヒー入れて来るねとなつちゃんは休憩所奥へ、サイホンガボガボさせながら話し始める。

「センター長が明日出て来たら、取り調べ中にデカ長さんがカツ丼出してくれました」

となつちゃんが虐め半分で行った、一平はウツツと発しマキはなつちゃんと高笑い。

そろそろお暇しようか、マキに言い一平は立ち上がった。

「皆さんのご協力を得て警察手帳なしの捜査も順調、早期真相究明に努めます」

なつちゃんに言う、外はまだ皆昼休み、ホームでは皆リラックス、フルフェイスを被り早馬に跨った、マキも男仕草で乗り込む、双発重低音を響かせ表通りに出た。

カルガモ親子はどこかいな連休最終日、早朝の仙川遊歩道を長玉持った一平はうろちよろし始めた、ハクセキレイやムクドリ、カルガモは水辺や岸辺で盛んに採食している。隣接する公園では二十人ほどが太極拳をしながら六時半を待っていた、今では珍しいカセットラジオからラジオ体操第一が流れ始めた、そんな長閑な光景が広がる。がカルガモさん親子は今朝もだめだ、朝飯に間に合うように帰らんと、まりの角が伸び始めてしまう、駐車場の方に歩を進め始めた。

細田誠一から電話。プッシュしおはよう、早いじゃないか何時もこんな時間に起きてんのか、それとも何か急用でもあるのかとガラケイに話した。

「一平さん、忘れないうちにと想い電話したんだ、昨日例のキザな監察官が吉祥寺に来てパチプロの田川の胸倉を掴みキスゲ橋の一件を話してた奴はどんな人物だったと、そりあー偉い剣幕で迫って来た、そいつらは七十絡みな男と二十代の小娘ではなかったかとも言っていた。監察官は厳ついボデーガード三人連れている、何事かと店内は大騒ぎ」

無言でいる一平に誠一が更に話しかける。

「その二人って一平さんと武闘家のお嬢さんではないのか」

「そのよーだね」

「田川の言うのには、屯していたチンピラ二人が一平さん等を見かけたと云ったらしい、監察官の必要な押しに負け出まかせに行ってしまったらしい」

「事実そーなんだよな、しかし小生と監察官は面識がない、今後どー出て来るかだ」
「ただ監察官はこれでキスゲ橋の一件に関与濃厚だねと誠一。」

「今の電話の件、小生現在は静観のみ、誠一も当たらず触らずいてくれ、田川にも言っといてくれ」

「よっしゃー何かあったらまた電話します」

食卓には納豆にタマゴヤキ、焼きのりにナスのヌカ漬け、タマネギと豆腐に油揚げの味噌汁が載っている、ガス釜からは湯気が上がり始めてた。適度に破れたG―ンズにTシャツにかっぽう着、髪はまだ結ってはおらずだらりと肩下へそんなまわりがお帰り、おはようさんと声をかけた。

「半世紀程前の頃かな、五月みどりと言う歌い手さんがいた、ステージ衣装は常に和服で艶っぽく唄い世の男性諸氏をメロメロにさせてしまった。しかし普段はG―ンズを愛用し結った髪を下ろしている、そんな姿が当時の月刊誌に掲載されていた、茶目っ気たつぷりと言うかステージ衣装からは想像できない容姿だった、いっぽくの厨房では着物で髪はくるくるっと巻アップしている、まりの着物姿しか見ていない、いっぽくのお客様はこの破れG―ンズ姿のまわりを見、何と言うだろうか」

「何ブツブツ言ってるのよ、ご飯食べたよ食べて」

「おっおはよー御免ちよつとブツブツしてただけ、小生も有名人になったよマキと吉祥寺で腕組んで歩っているところのフオーカスされてしまった、それがかの相谷監察官に知れた」

「何時もの事でしょうどうって事ないよ」

「それが大ありなんだ」

朝食に箸付けながら一平は話し始めた。

「想定内だが早く来てしまった、捜査は富士山で言えば六合目を過ぎた辺りで確信に至っていない、又小生が分らん、どでかい企てがあると睨んだ、が、それも未だ定かでない、これ等に現役監察官がどーからんでいるかもだ。相谷監察官とは面識はない、いずれは小生の前に立ちはだかり捜査支障大だ、まりやマキにも何ら接触もあろうしリスクも」

「一平、今更何言ってるのよ私は誰の女房と想ってるの、リタイアしたが元刑事の奥様ですよ、しかも元は八方面では

鬼の女ライダーと怖がれていた白バイ隊員よ、来たらそれなりに相対します、聞かなくなつたつてマキちゃんだってそう言う
と想うしチームいづく全員がそうだよ」

とまりはいつもの表情で言う、そーかそれならいーんだがと木製の茶碗でお茶を飲み始めた。

朝刊に眼を通し始める、相変わらず振り込み詐欺が後を絶たない。成りすまし住人もそうだが最近は手口が巧妙になった、家族を名乗り高額な振り込み要請があったならすぐ行動せず慌てず落ち着いて下さい、そして先ずは身近な人に相談をと社会面の見出しが白抜きで。

ルパン三世が呼びよるも非通知だ、もー来たかとガラケイ開いた。

「一平さん一平さんですな朝から御免、鳥撮り屋の野萱です」

一平はどこかふーっとした表情を浮かべ、はい一平ですご無沙汰していますと答えた。

「同級生の叶山さんから番号聞いてかけました、多磨霊園で今年もオナガとツミが営巣始めました、巣立つまで数週間は掛かるだろう、そんな鳥撮りが楽しめますよ、捜査で忙しいと想うが息抜きに出向いては」

「有難うございます、朝飯終わった所だ準備し向かいます」

「おつとい、忘れるところだった以前お主が飲んでみたいと言ってた獺祭、三鷹駅の構内スーパーで販売している、店では一人一本販売よつて数日はあるとの事」

「鳥撮りの帰りにでも寄つてくるとします」

「嗜んだら感想聞かせてくれ」

「相お分かりした、では後ほど」

「一人でかマキちゃんに連絡しなくつていいの」

まりが言う。

「連休とは言え明日から幼稚園が始まる、準備に忙しいと想う今回は一人で行く」

「あつそーだった、私も準備しなくっては」

とまりは和服に着替え下に降りた。

野萱さんを始め鳥撮り猛者さん等は大砲レンズを梢に向け談笑中。

「素浪人殿久し振りやないか、捜査は進んだ、どうなったかと皆で言っとつたところ」

「事故死なれど他殺が濃厚と言ったところ、だが調べが進むにつれ奥深さが感ずる」

「まー一平さんの事だ遠くないうちに真相暴くでしょう」

あつあー、あの野郎あんなところ登っちゃがる、誰とはなしに声が、松の木の中程にアオダイショウがくねらせながら上に、ヒナを狙っている、皆はどうする事も出来ずただ見守るだけ、我が子を飲み込まれてはとオナガは連隊を組み攻撃するが・・・無残な結果で省略。ツミの方はと視線を変えた、微かに綿のようなものが確認できる。

ガラケイが震える、開き一平ですと。

「宅急便白金センターの大堀です、昨日は留守にして失礼しました」

「アポ無しで行った、こっちが悪い」

「デカ長版お昼を有難うございました、皆大喜びです」

「とんでもねー、こっちこそ、リニューアルしたコーヒー御馳走さまでした、又モニタージュ作成にご協力有難うございました。一歩頂上に近づけました」

「お手伝いできてよかった、あつ、そのもう一枚のモニタージュ出来ました、Faxしましょうか」

「あいや実物のが良い取りに伺います」

「今日は私となっちゃんは詰めています、いつでもどうぞ」

「有難うございますでは後ほど」

と言つて一平はマキに電話した。

「一平どうしたの、明日からの保育準備してるとこ」

「大堀センター長から連絡が入って後一枚のモニタージュが出来ました、Faxと言っていたが詳細に欠けるだろう取りに行くと言った、小生は急用で行けん、すまんが行ってもらえんか」

「今言ったでしょう明日からの準備中だつて」

「教頭には小生からも言っておく、マキは一平からの頼みごとが出来ましたと言っても言ってみな、それならどうぞと云ってくれるはずだ、頼んだよ」

「んもーったく一平ったら、行つて来ます」

「ありがとう、それでこそマキちゃんだ」

一平は他に何かしゃべろうとしたがマキは一方的にスマホを切った。

「一平さん今のマキちゃんねえのか、わしゃー知んねーよ急用と言いつつここに来、帰りには獺祭購入とは、そのくせマキちゃんには使い走り」

「野萱さんご心配なく小生は他人のせいにはせん主義、ばれたら平あやまり」

「そうかそれならいい、獺祭飲んだら感想を聞かしてくれ、あの香りとごつくんした後の跳ねつ返りが堪らんよ、マキちゃんにも飲ませ聞いといてくれ、わしが販売所を教えた酒だと」

鳥仲間さん等とそんな談義してたらのりから電話が入った。

「一平さん忙しいね」

と大久保さんと永尾さんが口を揃えて。

「一平さんのりです、さっちゃん明日ならばいいと言っている、自分はいっぷくでワンマンショーの日ですと言ったら見たい聞きたい、奥様が入れるコーヒーも飲みたいと一つ返事、七時頃には行けると言ってきた、吉祥寺で待ち合わせして一緒に行きます、マキちゃんにも言つたいて」

相分った待つてる、と電話を切った一平だが明日は金曜日、女三人どーなる事やらの表情。

翌日帳の頃マキは一平に迫った、自分が何も知らないと思ったら大間違いと、厨房内にいるまりの背が笑いを堪えるかのように小刻みに動いている、まりの奴しゃべりやーがったな。

一平は申し訳ないと平謝り、強ばったマキの表情は角がとれつつ、それを見たまりは間入れず二人の間にコーヒー二つ置いた。・・・ねー一平とマキが口を開いた。

「これ大堀センター長さんから預かったモニタージュ画像、残念ながら受付さんの記憶が今一、全体像が精一杯だった、何と言うかゴルフで見かける様なつばが小さい帽子を被っていて黒目のスーツにハイヒールを履いていた、浅黒い女性だったがそれ以上はとセンター長が言っていた、でも良く描けてんでしようこの絵」

「ありがたい、正確差はともかく美大生さんの描き方からして身長は不二子と同程度で細身と考えられるな、でもどーかな、髪が長く帽子内に束ねてあればもう少し低いかな」

「不二子って誰よ」

と、新たな耐友かとマキがまたもや口を尖んがらかした。

「ご心配なく、ルパン三世がこよなく愛しているマンガ上の女性、峰不二子だ」

「あっそうだった」

と肯き一平の顔色を窺った。が、一平はうわのそら、画像と首っ引きだ。

こんばんわとのりとさっちゃんが入って来た、早かったじゃんのマキの問いに、バスもすぐ来、渋滞もなく順調、早めに着く事が出来ました。

「海老原さん、あついやさっちゃん、遠いところまで来て頂いて恐縮しています、昼は参拝者やそば処に来る人でそれなりの人が出ていますが日が暮れるとご覧のあり様、時折車が通る程度」

「でも静かでないじゃない、私のとこなんか一晩中騒音が止みません、緊急車のサイレも良く聞こえます、所で一平さ

ん、私に聞きたいと言うか確認したい事があるとのりから聞いていますが」

のりライブの日だ、間もなくテーブル席は埋まってしまうだろう、比較的空気がちな奥のカウンター角席に二人を招く。

マキも自然と一平の隣に、一平はさっちゃんの前に礼の二枚の絵を置いた。

「これ誰だか分かる」

「あらやだー、これ私じゃーないの誰がいつの間に描いたの、でも良く描けているね」

一平にマキ、まりまでがアツとした表情、この絵本当によく描けている、眼がやや大きくマンガ的だが全体像は実物の方がいいが。

「さっちゃんいつモデルしたの」

とのりが言う。一平は先日の白金センターでの経緯を話した、じゃーこれから取り調べるんですね。

「取り調べだなんてそんな大げさな、配送手続きした時の状況を知りたい、話して下さい」

一平、二人は夕飯まだだと想うよ湧水さんまだやっている、御馳走してあげたら、マキちゃんも行つてらっしゃい、まりは皆を促した。

取り調べにカツ井が付き物だが天ざるにまけとくとマキは二人を連れ外に、一平も後に続く。ラストオーダーに間に合った、四人は座卓を囲む。

いらつしゃいと女将がお茶を持って来、マキちゃん何に致しますかと、迷わず天ざる四つ。

「早速だがさっちゃん、世の親御さんはうちの子に限つてとそんな事はないと仰せ多いが、小生は、事さっちゃんに限つてそんな事はないと言ってきた、ただ忠実に業務を熟しただけと想っている」

「あの日、白家補佐官がディスク来て、すまんが今すぐこれを出してきてくれないかと、私は手付仕事ですぐ終わる、それからではと言ったら否指定日時につかないといけない、今すぐ出してくれと真顔で言った、書類とは書いてあったが

それとは持った感じが違った、包んではあるが四つ折りし束ねたパンフレットの様な手触りだった。それを並べてあるような、中は書類ではなくパンフレットではないでしょうかと正た、君はそんな事は気にしないでいい、言われた事だけをやつていればいいんだ、そりゃーきつい言が怖い顔で返ってきた」

「その包みの大きさはどの位だったか」

「A4紙よりやや大きく厚さは三センチ弱と言ったところ、王国PRパンフレットを関係機関に送付と想っていたが何と言ったかな個人宛でした」

「それ以外補佐官からの小荷物を送付した事は」

「他業務上出す事はありましたが補佐官からはそれつきりでした」

「その他何かお気づきは、あつ、この絵も白金センターで描いて頂きました、ご存知ですか」

と他二枚の描かれた絵を見せた。

「身長もありすらつとしモデルさんの様ですね、衣服は浅黒い顔にマッチさせていますね」

「なつちゃんが補佐官に頼まれ送付した小荷物は二十六年十二月。次が二十七年二月です、その時窓口に来た女性のモニタージユです、心当たりはないでしょうか」

「申し訳ございません、分りません」

お待ちどうさまと女将が天ざるを運んで来た。

「一平さん、耐友さんが又お増えになりましたね」

と言いながら座卓に並べ始めた。

「ビシッとスーツ着こなし品が漂うお方様ですね、どちらでお知り合いになられましたか」

一平はのりの顔を見ながら言った。

「のりが尊敬する人生の先輩です、噂を聞いて今宵はまりのコーヒーを飲みに見えました、そして深大寺ソバも」

ありがとうございます、ごゆっくりと言ひ女将は下がた。

「もう取り調べは終わり、カツ井いや天ざるの時間になった」

とマキは言い、割り箸をパチンと音をさせ薬味をツユに入れる。

「ここは評判良く日中は三十分待ちはふつう、一時間待ちもあるよ幸子さん味はいかが」

「適度のしこしこ感があっていい、表現出来ようもない食感が溢れている」

「それは良かった、待たされるが日中食するも良いよ、来てみたら」

「そうする、さつきバスの中で話していただけどのりちゃんのワンマンショー、私にも唄わせてくれるって、のりちゃんがつていました、一生懸命歌うから皆で応援して下さい」

「おー楽しみしている曲名は何と言う、今風の歌かいそれとも」

「それともの方です」

のりが話し始めた。

「小林幸子の雪椿だそうです名は幸子、新潟の生まれで共通、いつしか小林幸子の唄を口遊むようになった。そこで私も唄ってみたいな、自分はOKサイン出した、シンセサイザーに入っていないがドラムとベース音を曲に合わせるように調整しピアノを弾けば可能」

「そんな訳で私、雪椿唄います一平さん、マキちゃん宜しくね」

それは楽しみだと二人はさっちゃんに笑顔を返した。

八時ちょい前戻った、いっぶくは満席、さっちゃんにカウンター端の小物置き場にしているトンボを整理し座って頂いた、一平とマキは近くで立席と相成った。

いつもながらのりが開演前の準備に忙しない、時折ドラム音とベース音がながれ一人肯き裏に。

八時十五分、通り雨のイントロが流れ始めた。

音響機器の裏側からのりが現れる。日中、街では上着を脱ぎワイシャツ姿が多かった今日、のりは生足にチョーが付くほどの短パン、スケスケのノースリーブ、いや応なしに黒のブラジャーが見える、皆からやんやの喝采あびる。

・・・ラストナンバー手前でリズムが止まった、僅かな空間とも言えるフロアー中央に進み出た。

「今宵も後一曲となりました、けれども今宵はサプライズと言うか、スペシャルゲストさんをお迎えしております」

一般客を始め刑事さん等は皆期待とも想えるおやつとした表情を浮かべた。

「さー、登場して頂きましょう海老原幸子さんです」

ANAの法被を着こみ中央に進み出た。

「故郷をしのび唄うは小林幸子の雪椿です」

♪・・・はなはーえちこのはなはーえちこのゆきつばき。一番が終わった所で拍手が何処からともなく起こり二番が始まる、越後出の刑事さんもいると見え手拍子に懸命。のりは状況判断して予定外だが三番を唄えるようシンセサイザーを操作し眼で合図を送った、歌い終わった。さっちゃんに近寄り握手を強要、定年まじかと想える調布署のお巡りさん、強要罪で逮捕されちゃうよ、そんな声もどこ吹く風、わしゃー新潟は阿賀野市生まれと両手でしっかりなっちゃんの手を握りしめた。

ラストナンバー、好きになった人は即席とは想えぬさっちゃんとのデオ、二人は右に左に唄いまくり手を翳す、後日リビートを約束し幕となった。刑事さんらは心得たもん、のりとさっちゃんにハイタッチし戸外に。

さーてとマキが一平に迫った。

「昨日はよくも自分を出し抜いて鳥撮りに行ったよな、獺祭仕入れに行ったな、どうするんや今宵、のりちゃんと幸子さんは我が家に泊まります、爺っ様の酒はあるが自分等三人の酒がありません、その獺祭とか言うお酒でいい、これで昨日はチャラしてもいい」

「おおい、野萱さんに味がどーだったか聞かせてくれと言われているんだ」

「ご心配なく、野萱さんには自分から報告しておきます、でもこれ四合瓶だよな足んないなー、二階のPCディスク下に魔王の一升瓶があるそれも頂いて行きます」

まりがカウンター内でくすくすしている、しゃべりやがったなー、しょんねーなーと一平。

「道主、一太郎さんと刑事課長さんにもお分けするんだ、飲み過ぎんなよ」

はーいと園児の様な明るい返事が返ってきた、あつちよつとのりを呼び止めた。

「小生の傍にいた調布署の若いお巡りさんと婦警さん。手拍子し声援しながら言ってた、五月であの格好じゃー七月八月がどんな衣装になるか今から楽しみだ、コーヒーを飲み唄を聞きに来たんでしょ仮にも警察官ですよ、言葉を……と若いお巡りさんは同僚と想える婦警さんに小突かれていた」

「でー、小生も満更でないんだ七月八月は」

三人の顔色を伺いながら一平が言う。

「ご心配なく逆に露出が少なくなります、でもサプライズあるかもよ」

と含みを持たせのりと二人は外に。

一平はシャワーを浴びベットに腰かけレミーマルタンを嗜んでいた、すらつとし浅黒くモデル風な女性が頭から離れず二杯目をグラスに注いだ。

翌朝ボロミニで三人がやって来た、一平さん普段飲めないお酒ごちそうさまでした、三人は其々に礼を言い手に入ったらまた呼んでね、と複雑な表情浮かべる一平に、二人を送ったら戻って来るね、ミニに乗り込み異常とも言えるエキゾースト音を残し走り去る。

丸テーブル席に座りガキさんが調べたメモ書きを広げる、一つつつ確認し始めた。

二十七年十一月と十二月、今年一月と四月はコンビニ經由で白金センターより、竹内一成の名で紅葉丘の203菊川修に小包が送付されている、筆跡鑑定の結果竹内一成は補佐官の白家秀忠と判明している、紅葉丘での受け

取りは四回で内三回は浅黒い女性で筆跡もその三回は合っている。今年一月の一回は菊川修でサインした男は鑑定の結果相谷監察官だ、共に書類と称し小荷物は今迄のと同サイズ。一平さん等が偽パスポート申請書類を届けた一件から名をかせ、送付場所受け取り場所を変えたものと想われる。

「マキはどう思う」

「偽住所偽名での小荷物送付は明らか、白家補佐官と相谷監察官をしよっぱいて追及したら。二千万円授受したと吐くかもよ」

「おつ、おーい出来るもんならとつくにやっている、今の小生は偽ルポライターだ」

「だったらガキさんや何て言ったっけかな高輪署の刑事さん」

「マキ、忘れたのか仲良く腕を組んだ松宮刑事さん、松ちゃんを大泉刑事さんを」

「忘れた訳じゃないんだ、名が出てこなかっただけ」

「どっちにしろ忘れたんやろ、吹き付ける北風を遮ってくれた松ちゃんの温もりも」

「今日の一平なんだかおかしいよ、そんなに突っ込まなくったって」

「あついやー御免、その時状況を聞いていると、ついその時の二人は仲睦まじいカップルに見えたと記憶している」

「もう一平」

カウンター内で仕込み中のまりが言い出す。

「マキちゃんも困っているじゃないの終わりにしたら」

その声で二人は治まった、一平とマキが口を開いた。

「その刑事さん達に代わりにとお願いしたらどうなの」

「さつきも言った通りそれが出来るものならとつくにお願いしている、それが出来ないから遠回りし真実を探しているんだ、結論を急いでも結果は付いてこない、まあー焦らず地道に捜査するしかない。大さん、松ちゃん、ガキさん等に頼ん

だところで大使館も絡んでいる、人の手柄を横取りする相谷監察官もいる、リスクは必至、周りを囲み事実無根と結論付けてしまうのが落ちだろう、あげくには更迭する事だって容易い。昨夜レミーマルタンを嗜みながらマトリ方式で行くと悟った」

「そのマトリって何」

マキがガキさんに聞いた。

「事情聴取や任意同行等々せず、確信を得てから即逮捕、麻薬取締官が使う手口だ。略してマトリ（麻取）、一平さんは今回、その方式で行くようだ」

「じゃー一平、これからどう攻めて行く」

「無念ながら小生、行き詰まりが漂い始めている」

二人は無言でコーヒー嗜んでいた、どの位経っただろうかガラケイが震える。

「暫く高輪署の大泉です、例の一件どの程度進みましたか」

「今、ガキさんと話しとったんです、捜査は半ばちよいと言ったあたりです」

「さすが一平さんだなそこまで行っただんですか」

「確信がとれず行き悩んでいるところ、マキと睨めっこしながらコーヒー飲むあり様」

「捜査状況を教えてくれないか、先週いつだったかなコマドリでチビリチビリやってたんだ、そうしたら相谷監察官が二人引き連れて入って来た、間入れずに白家補佐官も登場、挨拶もそこそこに額を寄せ合い何やら打ち合わせの様な。電話じゃーなんだー来ない、ついでと言っちゃー怒られんな、あの腕つぶしの強いお嬢さん、連れて来てくれればなー、松の奴隣でそわそわしてるんだ、コマドリは五時からやっているその時間でどうだろう」

「小生は構わんがマキはどうか聞いてみよう、気分転換にコマドリでも行ってみつか、○だつて」

「俺等二人にびつくりすんぜ、じゃー五時にコマドリで」

二人はつつじヶ丘で待ち合わせした。一平はマキと公共機関利用の時はいつ憂鬱な表情をする、エスカレーターを降りたところでマキは手を振っていた予感の中。

生足にGーインズの短パンにGジャンは羽織るもカラフルなYシャツは第二ボタンまで外してある、スニーカーとマキバージョン、そんなマキと海岸や河川、野山に撮影や早馬に乗る時は良しとしても公共機関乗車は苦手、帰宅時間前だ電車は空席があるがマキが想いきつて寄り添い座る、離れ気味に務めている一平だが腕をとり離れんとするマキ。乗客の視線は自然に二人に、仲のいい親子かジジとマゴとでもみてくれりゃーいいんだがあのアラコキ、いい年しやがってでも想ってんのかと頻り、マキは一向に気にする気配なし、平顔し一平にこれでもかとひつついてくる。

五時ちよい前にコマドリの無垢扉を押した、つうつわーいらつしやいマキちゃんも一緒にと深くスリットの入ったチャイナドレスでタアちゃんが迎えてくれる。

「今日は土曜日近隣の大使館はお休み、貸し切り状態かも知れないよ、どこでも気に入ったテーブルに今ミュージック流すからね」

今風な曲が静かに流れ始めた、タアちゃんは何しようかとテーブルに品書きを持って来た。

「待ち合わせしているんだ、とりあえずレミーマルタンをボトルで摘まみを適度に用意して」

「知ってる人かな楽しみにしてよ、コップは幾つロックでいいよね、今用意し作るよ」

五時少し回った大さんと松ちゃんが入って来た、タアちゃんが待ち合わせつて大さん達だったの。

「はいそうです」

「一平さん早かったじゃーない、俺達とはとつかり事を一段落させ来ました申し訳ない」

「遅れたなんて時間通りだよ小生等が早かっただけ」

そんなやり取りを見ているマキはあれーつとした表情、松ちゃんもいる更にあれーつと。

「マキごめんな、昼前に電話とつただろ、あの時大さんから耳に入りたい情報があるんだ、電話じゃー何だから久し振

りだ一献傾けようじゃないか、松も連れて行くからマキちゃん、連れて来てくれとあの時言われたんだ、行き詰まっていた小生、言葉が足らなかった」

そうかそうだったのかとマキはあっけらん。手際よくロックを四つ作り乾杯しよう、音頭は俺がと大さんが立上がったカンパイ。偽り配送作戦の時アウトライン程度話したかもしれないが、酔わん内にと大さんがしゃべり始めた。

「あの日からは癒しと良き充電の為周一遍ここに来るようになった、帳の頃のとある日ここに来たんだ、そうしたら白家補佐官と相谷監察官がいたんだ、俺は面が割れていない、隣が空いていたのでそこに陣取り様子を窺った。二人はグラスを傾けるも小声で何時とか誰とか変わったとか途切れているが聞こえた」

「小生の想うに例の小荷物の送付受け取りを確認してたんではないか」

「いかんせん、話事の内容は掴めなかったが補佐官と監察官が繋がったのは確かだ」

「今の話から小生も」

「だけんど一平さん、電話では何だからと言ったのはその事ではない、驚くなかれよ一平さん、一ヶ月前いやもうちよつと前だったかな監察官が二人を連れてここにいたんだ、一人は屈強なやーさん風で元監察官の情報屋、もう一人は二十三、四と言ったところかなごく普通の若者だった。世間話もあったが若者のラジコン操縦を絶賛してた、何でも学生チャンピオンとか言ってた」

「その若者を室井と呼んでいなかったか」

「苗字ではなく禎一と名で呼んでた、新機種が届いたこのドローンはカメラを三台搭載している、ブラインドになつてもモニター見ながら目標物を探す事が出来る、三キロぐらいなら何のその積み込み可能、スーパーチャネルだ小回りも効き咄嗟の動きも出来る」

「禎一は学生時代、相谷監察官の情報屋室井禎一であろう、当時はギャンブルにはまっていたがそれなりに情報も多く持っていた。その他何か言っていなかったかドローンに関して」

「監察官が言うには前は回はパワー不足で手こずった、これなら楽勝だろう、値も張り通関はヒヤヒヤもんだった、いつお出ましにならんとも限らん、確り操縦訓練しとけと言った。田川もそうだがお前には住居を与えそれなりの小遣いも出している、二人とも心してくれと茶封筒を渡していた」

と大さんは淡々と話した。

「昨年五月の夜キスゲ橋方向でモーター音の様なと言った人がいる、室井禎一ら数人でヘリかドローンをそこで飛ばしていた、今までの捜査と大さんの言で小生は推測したが」

「わしもそう睨んだんだが纏りが付かず決めつけ兼ねる、一平さんまだ話は始まったばかり、ドローンの飛行規制が厳しくなった、海外で練習せよとパスポートと新たに茶封筒が禎一の手には、監察官、俺は申請してないよと禎一は怪訝顔。無論偽パスポートと当面の滞在費等諸費用だろう」

大使館や都とも付き合いのある監察官、その位お手のもんなのでは。それ以外に見た事は無かったのかと一平は聞いた。

「わしが見たのはもう一回、偽り配送作戦の翌週と記憶しているが、その時は情報屋の二人だけ、これと言ってごく普通の飲み友と言った雰囲気、グラス傾け一時間半ほどで引き揚げた。気が付けば自然に後をつけていた、禎一は白金高輪駅の改札に入る、田川の方は駅の二つ先の通りを曲がり七階建てのマンションへ入った。その時はほー良い所に住んでんだな、俺だつて今に見とれと見上げ自宅に戻った」

「あの田川が高輪のマンション住まい、情報屋ってそんなに景気良いのだろうか」

「一平さんもそうだろう、共同住宅の一室に戻ったらそんな事が、翌日出勤前に寄ったんだ、驚くなけれ暗証番号付きの正面玄関、ガラス越しに中を見れば豪華作りのエントランスホール、天井からはチョーが付くほどのシャンデリアが複数個下がついている、2DKとは言えとても俺の給料じゃ無理、田川の資金源はどこからだかもつか分からず仕舞い」

「で、ここで受け渡しされた茶封筒に現ナマが」

「そうだそう想った、が高級マンションに住める程の情報がそんなにあるものか」

「で、大さんはどーした」

「禎一の方はどこに住んでいるか確かめる必要があると張ったんだがヒットなし、最新型のドローンを買ったりパスポートの準備、操縦訓練と称しての軍資金、これ等からするとそれなりの現ナマが渡っている筈だ、監察官は何の為にそこまでして二人を優遇しているのかだ、一平さん俺の推理は半ば手前だがどう想う」

「あたっているんじゃないのか、しかし何の為と言われると小生も・・・、田川に禎一に大金を使っても、そこにはそれだけの企てがあるのでは、大使館も絡んだ」

松ちゃんとマキはそんな話をよそにトンボに腰かけグラス傾けながら談笑している、タアちゃんが言った通り開店三十分経ったが客は来ない。大さんは手持ちぶたさなタアちゃんにここへ来ないかと手招いた、声が掛かんのを待っていたかにつこり、ソフトドリンク持参でスリット意識しながら座った、大さんと一平には見えんが座るとより深くなる、マキがタアちゃんに合図した、膝から腰に掛けて手でスーッと撫でる、につこりした合図が返ってくる。

「一平さん、お好みのレミーマルタンを前にして二人とも何難しい顔してんの肴、上手くないの」

「そうじゃーないんだ酒も肴も最高よ」

「じゃーどうしてなのカウンターの二人とは対照的」

「大さん話してもいいじゃない、彼等が数回とは言え来てた店だ、何か進展が突破口が見つかるかも知れんよ」

一平がそう言っても肴に箸を付けグラスを傾ける。

・・・大さんが徐に口を開いた。

「なあー、タアちゃんと見込んで話する、又その件で何か気付き事があつたら話してくれ」

「あらまー改まって何よ、私と皆さんとの中じゃないの、お客様のプライバシーはひかえるやも知れませんが知っている事

はお話しします」

大さんは白家補佐官と相谷監察官、連れの二人等々、話半分程度で今迄の経緯を話し始めた。タアちゃんは都度肯きをみせる、経緯話が終わらん内にタアちゃんが割り込んできた。

「補佐官ってピース王国の白家補佐官でしょ、職員の方も良くお見えになり支払いは皆カードです、補佐官は付けで月末締め翌月末払いで集金に伺う始末、途中のカンマ以下は切り捨ててくれは常、金額が多ければカンマ二つ前の金額を何とかしろと上目線、でもお客様、畏まりましたと伝票を書き直す。だけどいくら大事なお客様とは言えこんなあり」

「職員の人はそんな事はないだろう」

「はい、他ピース王国職員の皆様は極めて紳士、そのような事はありません」

「過去にとりつばくれた事は」

「それはなかったが帰り際に勘定書きを渡す時、このつまみ注文してない消せと凄む事も、売り上げに多少響くが最近は来なくなって良かった、その補佐官の事だったら何なりと話します」

「そうかそんな男だったのか、大使館の補佐官ともあろう人が、他に何でもいい想い出せる事は」

「大使館が開設され職員の方も徐々に来始めた頃一人目立ちました。ただ仕事も出来背は高く四十半ばだが男前、女性職員には人気があったようだ、補佐官、補佐官さんと呼びキャツカキャツカしてることも多かった」

「そーかそんなに女にモテていたのか、偽配送作戦の時はそんな風に見えなかった、人それぞれですが分らんもんですねー」

「毎いんち顔合わせ仕事しているとそー言う人もいる、全員がそーとは限らん、さっちゃんなんか先日の話では敬遠気味の様だった」

「上司と一緒にだとなんかしてご機嫌とりではないが場を取り持ちもする、マキちゃんは一平さんにご機嫌取りする、しないでしよう、補佐官と女性職員はそんなところよ」

「自分なんか脚引つ張たり貶したり、一平だってそうよ」

とマキは一平の顔を覗く。

「そのお二方は別格ちゅーもん、引き合いにならん、女性職員はタアちゃんの言った通りかも」

一平はここに來た女性職員の中にこの女性はいなかったかと例の似顔絵をタアちゃんに見せた。

「浅黒く長身でスタイルも良い、どこかのモデル」

「いや、書類と称した小荷物を出しに宅急便の窓口に來た女性なんだ」

「横から見ると前が尖った帽子を被りサングラスをかけていて表情はよくわからないな、ここにはこのような人は來ていないと思う」

一平はやっぱしさっちゃんも言つてた通りこの女性は大使館職員ではない、職員であれば一連の捜査と関連づけられたんだがと残念と言つた表情を浮かべた。一平のそんな表情を見つつタアちゃんはソフトドリンクを飲み干ししゃべり出した。

「この女性と関連するかはですが補佐官が女性を連れて來た事があります。一昨年の秋に、九時過ぎ頃、客層を確認するように扉を半開きにし見渡し入つて來た、すらつとし長い髪の毛は七三にし左右胸元と後ろに垂らしてしました、カウンター横が空いていたのでこちらに案内しました。アラサーと思しき浅黒い女性の膝は見え隠れするスカートに洩いダブルでハイヒール、それ込みで170Mぐらいあつたかな、眼鼻はむろん顔は整いモデルの様だつた。補佐官はやたらと高い物を注文していました。言葉巧みに近づき連れて來たんだなこの……補佐官め、私は想いました」

「その後どー言つた経緯に」

「グラスを傾け時が過ぎた、テーブルには椅子が四つあり最初は相對していました。気付いたら腕が振れる程度まで

接近してた、ラストまで何を話していたかは分からず仕舞い、だけど一平さん大さん聞いてよ」

二人は、はい聞いています。

「その聞いてよじゃないの、支払いは付けではなく現金なのしかも釣りはいらないう、私はあれーと声をあげそうになって終いました、女性の方は程よい酔いが来ているのか多少ふらつき気味、補佐官に寄りかかり出て行きました。容姿は違うも浅黒い顔をした女性でした」

ウームーと何とも言い難い表情の一平にタアちゃんは言う。

「私は客商売、お見えになったお客様は意外というか覚えていますが、大きな眼だった、きりつとしながらも優しが漂うような、確か目尻に黒子が」

「幸子さんの時と同じように似顔絵作成したら何か進展があるようで」

とマキ。

そーするか、大堀センター長をプッシュした。

「おおー一平さん、先日の似顔絵ヒットしたようだなアルバイト学生さんもお役に立ったと喜んで、で今宵は何用」

「その似顔絵をもー一枚お願いしたいんだ、あの絵描き学生さんいらっしやるかな」

「ガールフレンドとディナー行くとか言って今出て行ったが、連絡つくよ、その店で待ってて」

程なくしてセンター長から連絡が入った、予定変更してそこに向かうと言ってた。

「ありがとう、で絵描きさんにはどー説明したんだ」

「簡単な事さ、一平さんがもう一枚絵を描いてくれと言っている、コマドリにいるから直ぐ来てくれと、そうしたらあの高級な店、僕等にはとてもじゃないが入れない、その店にいるんですか。そうだその店に入るよ一平さんの事だ飲み放題食べ放題だよ、ガールフレンドも間入れずオツケー、じゃー直ぐ行くと行って下さい、とまーそんなところ」

大堀さん、よくもと言いかけたが了解しましたと電話を切った。

二十分経たない内に今風な男女二人がこんばんわと入って来た、僕は美大生の青戸康でガールフレンドの鳴海彩花ですと一平等に挨拶する。はきはきとした自己紹介。

「小生等はその都度紹介します、予定変更させて申し訳ない、センター長から聞いていると思うがここは飲み放題食べ放題です、その前に早速ですがモンタージュ作成をお願いします」

タアちゃんは絵描きさんを促しカウンターに、彩花さんはアルコールはどうとマキが隣に座りながら言った、ごめん私全然ダメなの。それを聞いたタアちゃんが振り向き言い始める。

「鳥撮りさんが奄美大島に行つて来ました、お土産に濃縮マンゴを頂いたの、この下に氷とウォーターサーバーが置いてある、マキちゃん作ってあげて」

喉が渴いていたか歳はバラツキ、厳つい男と若い女の集まりに緊張が解けたかマンゴジュースを一気に飲み干した。

「喉が渴いていたの知らなかったごめん」

とマキ。落ち着き一平等に馴染んで来たか口元が緩んで来た、マキが話しかける。

「自分等も聞かれたら話します、良かったら聞かせて下さい二人の出会いを」

「私も美大生の三年です、キャンバスで出会う事も多くなり挨拶するようになった、互い苗字でなく名を呼ぶようになりました、何のコーシヤルだったかなカップルの男が違う女性の名を言い続ける、でもいいわと女が言う。康もそうなの、あやかだと言つても暫くするとあすかと私を呼ぶの、その都度ごめんと言うそんな康に引かれいいわと言いました、で食事を共にする様になりました」

「仕上がったとタアちゃん」

全身と上半身のA4紙2枚を手にかウンターから立ち上がる、良く描けていますと絵描きさんを褒め一平の前に置いた、上半身を手に取り見た瞬間一平は叫んだ。

「小生、この女知っている」

その声と同じして皆は驚いた、マキが意味深な眼でみる。

「どこで知ったのよどこで飲んだのよこの女と」

一平は普段見られん厳しい顔してマキにそんなんじゃないと一喝した。

和やかムードがその声で緊張すると言うかピリツとする、皆と馴染み始めたあやかちゃんの眼が白黒。

「十年前、テロを含めより凶悪事件対応の為警視庁に特殊防衛攻撃隊が結成された、大さんの方が詳しいと思う皆に説明してくれ」

「当初は武道有段者で射撃はまずまずという条件で発足した、二年後警視総監が変わり特殊隊視察に訪れた、これでは所轄が一つ増えたに過ぎん、凶悪犯罪やテロには太刀打ち出来ない大幅に改められた。射撃はライフルを加え基準を設け、武術は二段以上にし更に多国語は二か国以上日常会話可能、車運転能力も厳しい基準を設けた。更に富士の麓に模擬訓練を含め広大な場を創った、レスキュー隊顔負けの訓練したり凶悪犯が山間や沼地に追い詰めたり逃亡したと想定し、平服や武装したりし崖を昇降し沢を革靴背広で走破、沼地では腰まで浸かり搜索訓練模擬攻防も、桜田門地下では射撃と武道に明け暮れた。甲斐あつてか警視庁特殊隊は国外公安をも唸らせた。い

い事尽くしではない、年齢的にも付いて行けず厳しい訓練で所轄に戻って終う者が続出、五十人居た隊員は十名になつてしまった、何を隠そうわしも戻り組の一人。翌年からは大卒見込み者の強健で語学堪能者に絞って募集を掛けた。三十人程が予備軍として毎年入隊、それでも一年間の予備訓練を通過するものはほんの僅か、五人通過すれば多い方だ。こんなところでもいいかな」

「ありがたい、その隊長は嘗て小生が面接試験を行った人物、その後出世し捜査二課に配属された。二回り近く年下だが小生とは比べもんにならない秀才で捜査力も備えていた。

偶然に月一のデカ長会議で再会、休憩時に隣り合わせて昔を偲びコーヒを飲んだ、小生カメラを多少いじり近隣の公園や河川で野鳥を撮っています、ご趣味は何ですかと尋ねた、一瞬場違いな問いに戸惑っていたが顔が緩み私

もだよと返ってきた。四季を通じて花の写真を撮っています、調べ目的の花を撮った時の感激は忘れられない。でも谷端さん、デカ長会議で趣味を聞かれたのは初めてです、がこういった場に心に安らぎを与えてくれます、終了後予定が無かったら馴染の居酒屋があります一献傾けましょう。それからというもの一献傾ける仲になった」

「話はもう少し聞いてくれ、二課長は檜沢源三と言います源さん一平さんと呼び合った。極秘なれど一平さんには知らせておこう、特殊隊結成と同じして入隊して暫くは一緒に飲まれんし連絡も出来んが私は元気にやっていると想ってくれ、変わり事があれば連絡すると、それつきり無しの礫になった。それが二十六年八月私は元氣してるぜ一平さんも元氣してるかと電話が入った、今年四月から特殊隊隊長を仰せつかった、一平さんは充分見分を広めていると想うが良かったらここに来ない案内しますが、そんな訳で出世祝いを兼ねて表敬訪問と相成った。

警視庁地下で射撃訓練と武道、外国語授業等を一時程度案内して頂き富士の裾野へ向かった。いきなり仮コース上をバックでのフルスロットル走行が眼に入った、源さんは今日はテロリストが沼地に逃げ込んだと想定した訓練が行われているそこに行ってみようと言う。草原にブッシュがはびこり大小の沼地が点在している、あの大きな沼の向こう岸を見てみると双眼鏡が手渡された、スーツやカジュアル等々様々な衣装をまとった人達や迷彩仕様も数人が談笑しているようだ。源さんがトランシーバーに向かい二人のテロリストは対岸で一息入れている様だ、氣付かれんよに近づき確保せよ。

十五名の隊員はピストルを脇下にしっかり固定しライフルを背負い沼地に入った、レシバーからは作戦開始と入った、中程で胸まで浸かる、泥沼だ進みづらいが一步一步確実に歩を進めている、悟られるとも分らん体制をもつと低くと檣する。葦に触ればテロリストにばれてしまう触るなブッシュもだ、檣が続くがその都度隊員から了解と返って来る、時折背を屈め頭まですっぽり泥水に浸かる、顔をあげれば眼だけが白く見える。小生等の岸で一人また一人と上陸、泥だらけでほく前進し小生の腕をとりテロリスト確保、源さんのご苦労様で隊員らは笑顔を残り訓練棟へ走り去る、一平さんこれが沼地訓練だやってみる、即座に首を横に振った」

お昼だなー用意してある隊員らと一緒に食べようと源さんに連れられ訓練棟の食堂に。カレーライスは大分手前だが高原の程よい風と共に香りが漂って来る。隊員さんはやる事が早い、小生が着くころにはシャワーを浴び着替え食堂に集まり始めた。源さんは全員揃ったのを見計らい小生を皆に紹介、小生も手ぶらではと魔王を持参した、源さんとの出会いから今日までを話し皆に掲げ今宵はこれをやって下さい。うおーっとどよめきが」

「ありがとう今晚皆で頂くよ、今日午後は林の中での訓練となる。ところで一平さん何か気付いた事は」

「小生にゃーとてもじゃないが耐え忍ぶ訓練もたんよ、女性隊員がおられるんですね」

「そうなんだ寺島加奈と言い隊員等にカナさんカナちゃんと呼ばれ特殊隊のアイドル的存在」

カナさんは小生に会釈を、それが合図の如く班長がいただきます。

「カナちゃんは二十五年四月に予備入隊、当時この細い体で厳しい訓練に耐えられるだろうか、一週間もしないうちにギブアップ、皆はそう見ていた。ところが一平さん射撃の腕はめきめき上がるは今では隊員一、二、スクワットを始め逆さ吊りの腹筋、数々の体力づくりメニューを熟す。重量物移動に難はあつたが見事予備隊を卒業し今日に至っている。背も高くスタイル抜群、人目を誘うルックス、浅黒いがモデルとしても十分とおる、しかも酒が強く好きだ、魔王見た時の目の輝きが増した、どうだい一平さん」

午後も様々な訓練模様を拝見させて頂き東京に戻った。長くなってごめんと一平は皆に。

その女性隊員がこのモニタージュと似ているですねとタアちゃんが言った。

「そーだ黒子の位置、顔の輪郭、眼鼻口の特徴が出ている、その浅黒い女は特殊隊の寺島加奈に相違ない」

「で、これからの捜査をどう進めて行く」

とマキが言った。

「わしも元特殊隊員ではあるが今はとんと、でも本庁に行けば昔なじみに合えるかも、一平さんなら隊長にいつも簡単にコンタクトがとれるんでは、最近ご無沙汰している久方振りに一献傾けようとか」

「まずは浅黒い女が寺島加奈だと確認する必要がある、源さんに連絡だが特殊隊は今日は休み、小生休日に電話は気が引けるが携帯を聞いている、起こりはしないだろう、コンタクトを取る意味で電話入れてみよう」

お休み、おくつろぎの所失礼いたします、とよそ行きの声で源さんに呼びかけた。

「おー私だ源だ、どうしたんだいそんなよそ行きの声で」

「現役さんの休日に電話を入れるのが苦手で」

「私と一平さんの仲じゃーないか気にせんと電話入れてくれ、今夜は何か用事があつて入れたんじゃーないか、どのような用件で」

「富士の裾野で出会った、寺島加奈隊員についてお尋ねしたいんだが、ことは早い方が良い電話じゃーなんだ、明日時間をとつてもらえんだろうか」

「私も話したい事がある、明日は私に時間的余裕がある日だ、お昼に新宿にでも出てランチとしゃれこもう、いつだったかな一平さんがお茶漬けとか言つてた店そこでどうだいな」

「あー、歌舞伎町入口のお茶漬けとんかつ、すずや新宿店だな、工事中だったが四月に新装オープンした、そこにしよう」

了解、一二：〇〇（ひとふたまるまる）、そこでと自衛隊口調が返ってきた。

「何か推理番組の出演者の気分になつてきた、推理ファンの私は興味深々なつちやつたよう、あつ、いけないもうこんな時間、皆さんお腹空いたでしょう夕飯御馳走するわ、ご飯仕掛けるね炊き上がるまでに二十分、その間におかず作るからねマキちゃんも手伝つて」

マキは気合いを入れるかおしほりを起用に繋ぎ鉢巻しカウンター内に。

「冷蔵庫の魚介類お願い、明日は休み全部調理して構わない、出刃は流し下に入っている、私はツマを作ります、海藻サラダにこのハンバーグも使っちゃおー」

一平はいつになく神妙な顔つきで大さんと話してる、そんなのを横目に青戸康と鳴海彩花は高級店店主さんが夕飯を御馳走するの言に二度とないであろう今宵、若いカップルは興奮に酔い止まず、松ちゃんも同様だ。

松ちゃん突っ立っていないでもう直ぐできる、テーブルを並べ直し七人分の席作ってと檄が飛ぶ、あすかちゃん、あついやゴメン彩花ちゃん青戸君に手伝ってもらって皿に茶碗、箸としゃじそこの棚にあるからカウンターに出して、テキパキとタアちゃんは支持する。

マキが真アジとイナダを三枚にお下ろす、中骨を火にかけ菜類を入れスープを作る、カマは一平と大さん用に二つに切り塩を振りレンジに、殻からカキ取り出す、生イカは腸を外し上下の皮をくるつと一剥き、縦にスーッと出刃入れ横に細く切りイカそうめん、サザエも生食でいこう、ふたの部分にフォーク刺し捻じるようにし中身を取り出す。それらをカウンターで大皿に移しツマとオオバを加え盛り付ける、女板さん二人、チョーが付くほど手際良い、タアちゃんが出たと。松ちゃん運んでとマキが、残しチャーだめよ全部食べて、皆に喝入れた。

俺に任せとけと若き絵描きさん、俺だつて食い氣にかけちゃー負けんぞとまっちゃんも、かくて食事会は始まった。みるみる盛り付けが低くなり底が見え始め大目に炊いたご飯も空になった、其々の表情は満腹感で溢れている。一平は若いもんに後片付けを手伝わせレミーマルタン代を支払う、後は任せてお暇しようと大さんに声かけた。

翌日マキはいつぶくの仕込み時間に合わせて裏口から入って来た。

「おはよう、どうしたのこんなに早く、まーそんなのどうでもいいか今コーヒー入れるね」

「いつだか一平達が言っただしよう、浅黒い女を、その女の素性が今日分かるかも」

「でもここに来て分かるの」

「まりさんそうじゃないの、今日一平がその女を良く知っている人と会った、出し抜けに行かれるとも限らない、自分も連れてつってもらおうと一平が出て来るのをここで待っていれば」

「マキちゃんらしくないね、連れてつてと言えばいいんじゃないの」

「昨夜、特殊隊とコンタクトをとっていた時、近寄りたいたい表情をしていた。言いそびれてしまった」

「マキちゃんにもそんな一面あるとは、もう降りて来よ、コーヒ―飲んで待ってて」
階段を足音を響かせ、おはようと一平が入って来た。

「おっお、マキ早いじゃないか幼稚園は休みだしまだ寝てる時間じゃないのか」

「お願い事があります」

「何だ改まって」

「今日お昼に新宿に行くんでしよう、一緒に連れてって」

「なーんだお願い事ってそんな事か、行く時間になったら電話する予定してた」

「ほーらねー、マキちゃんを置いて行く訳ないでしょう」

カウンター内で振り向きにつこりとまりが。

「だって昨夜の一平黒目はでっくなり異様な雰囲気だった、話しそびれたよ」

「マキお前こそ異様だぞ、昨夜はいつものマキじゃなかった」

「一平こそ時にはきつと口を一文字にし大さんと難しい顔し話してる、隊長さんと電話中も終わってからもういっぴん平だったもん」

「おーそだったかゴメン、捜査も七合目に行けるかもしれない、そんな事を壊れかけたCPUが勝手に動いていたんだ、それよりも昨夜は直ぐお暇したのか」

する訳ないじゃないのとマキ口調が戻った。

タアーさんはもうお客は来ないし来たとしてもお断りとドアロックしてしまった、デザート食べようと高級メロンを。

「日付が変わる頃までなら構わない、ゆつくりしてってと言ひ出した、そんな訳で言葉に甘えました。タアさんは話し始めました、私は焼津の生まれ両親は魚屋を営んでいたが若くして病死、今は兄が後をとっています、ここの魚介類全

部とり立てを送ってもらっています。

高校を卒業と同じして私は上京、料理屋に仲居として勤め始めました。二十歳の時結婚しました。副主任が近づいて来た、業務上の話かと想ったら料理はさしすせそだとか魚の捌き方等休憩時間にべったり、他従業員の手前離れようと努めていたの、結局は彼の押しにまけ翌年結婚した。だけど結婚して初めて知った彼の本性を、チョーギャンブラーだった」

自分と絵描きさんカップルと松ちゃんは、次はと言った表情でメロンを頂きコーヒーを」

「私のお金にも手を付ける事しばし、でも負けはせんぞと好きな神輿担ぎをし頑張った、密かに魚捌きを始め料理も習った、甲斐あつてか二年で調理師免許を取得、結婚五年後、満を記して彼に一枚の紙を示し印を押させました。その後三社祭で白金にビルを持つオーナーと知り合いになった、ちようと路地に入るが地下が空いている使ってもいいよと、保健所の許可をとり親が残してくれたお金と借金でコマドリをオープンさせた。一年ぐらいいは赤字だった人が人を呼んでくれて帳簿はアメリカの母となった」

「アメリカの母って何」

「あつごめん、母はマーマでしょ、それでアメリカの母とは「まあまあ」です」

「タアさん、中々どうして洒落上手ね、アメリカの母からどうなったの」

「その後もタコの足、イカの足だったがお陰様で借金は五年前に完済にこぎつけた、現在は高級酒も揃え魚介類も上等品を送って貰うようにしました。いつしか高級店のイメージが定着し大使館の皆様も来て頂けるようになりました。でも皆はリーズナブルな料金よ」

「さすが太っ腹タアさん又来ます、でもそのポチポチって何」

「あらいやだ又出ちゃった、それぞれ吸盤がポチポチと付いているでしょう、そっから来てんのよ親が良く使っていた、景気はどうだいイカの足だいタコの足だいと」

「お父さんも中々どうして、話を盛り付けるのが上手だったんだね」

「私もそんな血を受けついでしまった」

「淡々とした表情で話していた、そんな話を聞きつつしてたら日付が変わってしまった」

一平はつじけ丘駅からからマキルックにどこか困惑気味な表情で区間急行に乗り込んだ。

西口に出て大久保方向に少し行った所を右に曲がった、小さな店が所狭しと並ぶ、マキの怪訝そうな顔に

「この辺はサラリーマンの安らぎの地、帰りがけにちよいと一杯ひっかけるにゃーもつてこいの場所」

と一平は言する。二十メートルほどで突き当りになり路地は右に曲がる、左に曲がるとコンクリートむき出しで低めな地下道が続く。

「幼少の頃親に連れられここに来、電車が来るのを待った、ガタゴト近づいて来てグアーっと行き過ぎる、頭上直ぐ上を行き過ぎる電車音と伝ってくる振動を楽しんだ」

「へーそんな事して遊んだの、一平にも幼少期はあったんだよな」

この一、マキ、と一平は怒りとも複雑な表情する。

「マキは新宿にもこんな所があったのかと興味津々」

回り道したが早めに落ち合い場所の新宿駅東口に着く。

大さんと松ちゃんがここだとばかりに手を振っていた。昨日はと挨拶を交わす、程なくして櫛沢隊長も合流、東口の交差点を渡り歌舞伎町方面へ、靖国通りに出た西口ガード寄りの交差点角に新装なったすずやの看板を見つけた。若き店員が多い中、制服が違った三十代の男性が小生を頻りと見ている、支配人だ、小生が分ったか改装中で長らくお待たせいたしました、やっと四月にオープンにこぎ着ける事が出来ました、今後今まで同様宜しくお願い致しますと業務言葉が返ってきた。五人様ですねと二人用席をくつつけ楽に座れる様に並べこちらにどうぞ、間入れず作務衣のような衣装の女性が品書きとお茶をも持ってきた、お決まりになりましたらこちらのベルでお呼び下さいと一礼し

下がった。

「トンカツやカツライス、カツ丼もあるが、お茶漬けトンカツがメインだ、それでいいかな」

「構わんそれでいいこう」

「大中小とあるが」

「一般的に中だ、マキは小で行くか」

「中でいきます」

昨夜もマキちゃんいっぱい食べてたよなと松ちゃん。

「松をじろつと見返した、残つしゃーいけないと頑張つて食べたよ」

「ほつほーそうだったか、じゃー中五つ、マキそのベル押して」

隊長は食事が来る前に話しておこうと言い出した、はいお願いしますと一平。

「彼女は外語大卒業、英語にフランス語、パオ後と外国語は難なくパス、部活で空手は初段の腕前、水泳は大学では引けをとらなかつたと、フルマソン完走も、が試験管等は体力が今一だ、ベンチプレスが既定に届かない、最終審査で不合格点がついた。が一平さんの言を思い出した。「警視庁試験で不合格点を付けられた私をあの目の姿勢が他の誰よりも優っている」、当時試験管だった一平さんが合格の判を押してくれた」

無念な表情を浮かべていた彼女を私は見た、試験管等に何がベンチプレスぐらい、他は全て上位でパスしている、彼女の眼を姿勢を特殊隊に闘志を感じる、落としては特殊隊の損失だと上官に食い下がった、渋々ながら合格の判を押させた」

目を細め当時を想いだしながら隊長は話し出した、大さんが合いの手とばかりに言い出す。

「わしも特殊隊の一員だったが年というかあの厳しい訓練には付いていけず挫折、自衛隊やレスキュー隊顔負け、いや顔負けと言うより想像を絶するチョーハード訓練、彼女はどう相對していたのか」